

いい本 みつけた！

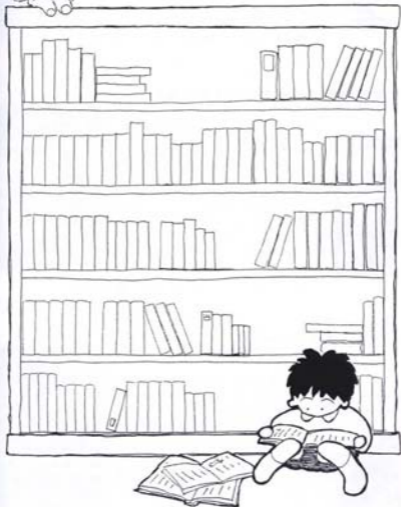
小学校1～3年生



生駒市図書館

物語を

読みはじめた人へ



『あおい目のこねこ』

エゴン・マナーセン/さく・え せたていじ/やく
福音館書店 1965 109p 1,200円



青い目の元気なこねこがねずみの国を探しに出かけた。こねこは、魚や、はりねずみ、5匹の黄色い目のねこたちに出会うが、みんなは青い目を見ると大笑いしたり、意地悪をしたり、無視したり。それでもこねこは「ここへたれない」「なに、こんなことなんでもないや。」と旅を続ける。そのうちとんでもない出来事に巻き込まれたこねこは、そのおかげでねずみの国にたどり着いた。黄色い目のねこたちは、ねずみを食べて丸々太り、青い目になってきたとくるくる優しく鳴くのがあった。抽象画家としても有名な作者の絵はシンプルで力強く、青い目のこねこの生き方同様、読む者に勇気を与えてくれる。

『あたまをつかった小さなおばあさん』

ホープ・ニューウェル/作 松岡享子/訳 山崎百合子/画
福音館書店 1970 104p 1,500円



小さな家に住む小さなおばあさんは、穴だらけの毛布の代わりに羽ぶんとを作ろうと、がちょうを12羽買った。ところが、羽をむしるとがちょうが寒くなる。そこでおばあさんは、いつものポーズで考えた。ぬれタオルで頭をしばり、椅子に座って人さし指を鼻の横にあてて目をつぶる。こうして思いついたのは……「おばあさんが、はねぶとんを手に入れた話」。他に「一が、たった一本のこったマッチをだいいじにした話」等、おばあさんが上手に頭を使ったゆかいな話を8編収録。挿絵のおばあさんは愛嬌があり、明るい色調の絵がお話によく合っている。

103-①

『あひるのバーバちゃん』

かんざわとしこ/さく やまわきゆりこ/え 偕成社 1974 32p 800円
(バーバちゃんの本)



あひるのバーバちゃんが、町へお買い物。荷物がいっぱいになったので、ポケットが5つもついたすきなリュックサックも買って、いちごにオレンジ、クッキー、パイ……とたくさんつめた。帰りにバーバちゃんは、迷子のひよこたちに出会い、リュックのポケットに入れて、家まで送ってあげることにした。ところが途中で、ひよこたちは、ポケットの中のいちごやクッキーをちゃっかり食べてしまう。お人好しで好奇心旺盛、ちょっととぼけたバーバちゃんが主人公の楽しいお話。バーバちゃんをいさかいと描き出した愛らしい絵は、この作品に欠かせない。シリーズは全部で4冊。

『アルフはひとりぼっち』

コラ・アネット/作 掛川恭子/訳 スティーン・ケロック/絵
童話館出版 1998 [1977 あかね書房] 80p 1,200円



ロバのアルフは毎日働きづめ。それなのに、おじいさんとおばあさんは、遊んで暮らすカナリヤやイヌやネコばかりかわいがり。それが不満なアルフは、カナリヤを真似て歌ったり、イヌのようにじゃれてみたりしたが、相手にされない。とうとう家出を決意したアルフが選んだ場所は、よそ者の国でも、となり町でもなく、屋根の上だった。おじいさんたちは大きな物音にびっくりして、魔が来たとかんがいがするが……。ひたむきだけれどおっちょこちょいなおつぱいアルフの姿が子どもたちの心をつかむ。暖かな愛情に満ちた結末には、ほっとするだろう。アルフの気持ちを十二分に表した絵も美しい。

『いやいやえん』

中川千枝子/さく 大村百合子/え 福音館書店 1962 177p 1,200円



ちゅーりっぷ保育園には70ぐらゐも約束がある。4歳のしげは、いつも約束を忘れては、先生に物置に入れられそうになるいたずらっ子。しげをはじめ、子どもたちが保育園を舞台に繰り広げる楽しいお話を7編収録。男の子たちが、積み木の船「ぞうとりおんまる」で、大海原へ乗り出す「くじらとり」や、しげるを食べようとしたおおかろをみんなで捕まえてパトロールカーに乗せてしまう「おおかろ」等、子どもをよく知る作者が、日常と空想の世界を自由に行き来する子どもたちの心をそのまま物語にした幼童童話。子どもたちの間で長く読み継がれている。

『エルマーのぼうけん』

ルース・スタイルス・ガネット/さく わたなべしげお/やく
ルース・クリスマン・ガネット/え 福音館書店 1963 128p 1,100円



エルマー少年は、年寄りの野良猫から、どうぶつ島に捕われているかわいそうな子どもたちのりょうの話を聞かされる。りょうの救出を思い立ったエルマーは、長ぐつ、輪ゴム、チューインガムにぼうつきキャンディー等、いろいろなものをリュックにつめ込んで出発する。どうぶつ島に着くと、次から次へと現れて、行手手をささえざる猛獣たちを相手に、リュックの中の小道くもを使ってユニークなアイデアで危機を乗り越えていく。テンポのいい展開が子どもたちをぐいぐいとストーリーに引き込む。続編の『エルマーとりょう』『——と16びきのりょう』まで、3冊を一気に読み通す子が多い。

1

もつともつと 読みたい人へ



『小犬のピピン』

ローズマリ・サトクリフ/作 猪熊葉子/訳 小野おかる/絵
岩波書店 1995 62p 1,300円

小犬のピピン

ローズマリ・サトクリフ 猪熊葉子 訳

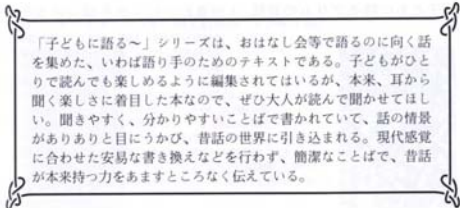


ピピンは、金色の毛をした怖がりの小犬で、飼い主のマミーと寄り添うように暮らしていた。ピピンが病気で亡くなると、マミーは、ピピンの魂を宿した子犬がどこかで生まれ、その犬とともに暮らせる日がくると信じて探し始める。一方ピピンは、天国の門番に「マミーのいる家に帰りたい。」と強く訴え、マミーの待つ世界へ通じる暗いトンネルを教えてもらう。ふるえながらも勇気をふりしぼり、ピピンはトンネルを通り、生まれ変わって愛するマミーと再会する。互いを魂の伴侶とし、信頼し合うピピンとマミーの絆の深さが胸を打つ。人も犬も愛する心は変わらないと静かに語りかけてくる1冊。

『こども世界の民話 上・下』

内田莉紗子・君島久子・山内清子/著 鈴木裕子/画
実業之日本社 1995 各240p 各1,845円

『子どもに聞かせる世界の民話』(1964年刊)に収録された81編から42編を選び、子どもが自分でも読めるように再編集した民話集。動物が知恵を働かせる話、正直者が幸せになる話、ものいわれを教える話等、多彩な民話が文字どおり世界中から集められている。どの話も素材で親しみやすく、見知らぬ国の風土を感じさせながらも、どこかで聞いたことがあるように、国や人種が違っても人の根っこ部分は同じだと教えてくれる。幼児・低学年向けの構成で、「ひな鳥とねこ」(ミャンマー)「アナンシと五」(ジャマイカ)等、おはなし会で有名な話も多い。



「子どもに語る～」シリーズは、おはなし会等で語るのに向く話を集めた、いわば語り手のためのテキストである。子どもがひとりでも読んでも楽しめるように編集されているが、本来、耳から聞く楽しさに着目した本なので、ぜひ大人が読んで聞かせてほしい。聞きやすく、分りやすいことばで書かれていて、話の情景がありありと目にうかび、昔話の世界に引き込まれる。現代感覚に合わせた安易な書き換えなどを行わず、簡潔なことばで、昔話が本来持つ力をあますところなく伝えている。

『子どもに語るアジアの昔話 1・2』

アジア地域共同出版計画会議/企画 松岡享子/訳
ユネスコ・アジア文化センター/編

こぐま社 1997 188p~189p 各1,600円



「アジアの子どもたちが同じ本を共に読むことにより、お互いにもっとよく知り合おう」という目的で、1975年から1981年にかけてアジア地域のユネスコ加盟国により共同出版された「アジアの昔話 1~6」(福音館書店・絶版)から27話を選んで再編集したものだ。天に帰った妃を取りもどすため、天の王から出された難題に先祖の魔力で挑む壮大なスケールの「スートン王の冒険」(マレーシア)。足の不自由な孤児の少年タオ・カムがその名人技を王さまに認められる「小石投げの名人タオ・カム」(ラオス)。他に「5つのだんご」(スリランカ)、「ちっちゃなゴキブリのべっぴんさん」(イラン)、「ジャックとワニ」(バングラデシュ)等を収録。

『子どもに語るアンデルセンのお話』

ハンス・クリスチャン・アンデルセン/著 松岡享子/編 大社玲子/屏絵
こぐま社 2005 219p 1,600円



おなじみの「おやゆび姫」や「皇帝の新しい着物はだかの王さま」を始め、かわいらしい小品「豆の上には寝たお姫さま」とんちのきいた「小クラウスと大クラウス」、美しい声の小鳥と皇帝の心の交流を描く「うぐいす(ナイチンゲール)」等、多彩な9作品を収める。初めてアンデルセンを読む子どもたちにとって、長年子どもにお話を語ってきた語り手たちが、アンデルセンの生誕二百年を祝って聞いたお話を「紙にうつして」生まれた本。文章は、語るために原作を尊重しつつ慎重に整え直されている。語るのはもちろん、声に出して読む等、ぜひ子どもたちに耳からも味わわせてやってほしい。

いい本 みつけた！

小学校1～3年生



生駒市図書館